



## 懐の深さが認められない国家

我が国には「日本学士院」という組織がある。日本の国立アカデミーと称される文部科学省の特別機関であり、日本学士院法に「学術上功績顯著な科学者を優遇するための機関として、学術の発達に寄与するため必要な事業を行ふ」とされており。毎月定例の研究会が開催され、いるようであり、その成果は公刊されている「日本學士院紀要」で知ることができる。大学時代に憲法の講義を受講していた橋本公亘教授が会員となつたことから、その存在は以前から知つてゐたが、今般の菅首相が日本学術会議から新会員として推薦された6人の任命を拒否した旨の報道を聞いた時、この日本学士院と日本学術会議とを混同してしまつていった。

いるようであり、その成果は公刊されている「日本學士院紀要」で知ることができる。大学時代に憲法の講義を受講していた橋本公亘教授が会員となつたことから、その存在は以前から知つてゐたが、今般の菅首相が日本学術会議から新会員として推薦された6人の任命を拒否した旨の報道を聞いた時、この日本学士院と日本学術会議とを混同してしまつていった。

さて、國家レベルであろうが会社レベルであろうが、その大小を問わず、会議のメンバーを選ばるに当たっては、反対意見を述べるなどして他のメンバーと協調し難いであろうと思われる人材を避け、会議で議論をするにあたつて問題が生じないよう配慮することはいわば人間の当たり前の対処方法であろう。会議での議論が錯綜し、終わりなきものとなるないように、人材の選出の時点から、早めに意図的な対策を練ることは、その会議の設立の趣旨がいかない

提言などを行っており、「これまで」「地球規模の自然災害の増大に対する安全・安心社会の構築」と題する答申や、「計算機科学研究の推進について」と題する勧告「脱タバコ社会の実現に向けて」と題する要望を行なうなど、その活動範囲は多岐に及んでいる。「岩盤」の一つになつてしまつてゐる歴史的にもそうであるが、昨今の日本社会の風潮を見ていると、日本人が他者に対して同調するようになり一層強い圧力をかけ、また、多数派によって意見の合わない者を排斥するような傾向が深く蔓延しているのではないかと危惧している。

私も含めて日本人は、多様な意見を述べ合うことで、より推敲された結論に至るようなプロセスを経ることが実は得意ではないかも知れない。多分に物事をかみ砕いて追究するよりも、感覚的な受け止め方に左右され、多数派の落ち着きどころをすぐさま感受しようとする傾向が強いと思っている。しかし、時間をかけて多様な意見を述べ合うことは大切であり、その多様性の幅に限定を設けることは原則的に必要ない。時々思うことではあるが、後で振り返つてみて、遠回りだと思うことは、その会議の設立の趣旨がいかない